

CONTENTS

新長官挨拶

文化庁長官就任挨拶

文化庁長官 近藤信司・4

いきいきミュージアム 美術館・博物館事業レポート 57	
佐賀県立名護屋城博物館	20
芸術文化の風 21	
開かれた「新しい美術の場」の可能性(佐藤可士和)	21
著作権Q&A 『著作権なるほど質問箱』から 21	
組織・機関における著作物の利用～行政機関～	22
言葉と暮らし 9	
機械翻訳と言葉の理解	23
伝建地区を見守る人々 伝建歳時記 33	
新選定 和洋建築が建ち並ぶ佐賀鍋島鹿島藩の醸造町 (佐賀県鹿島市)	24
くらしが育む文化的景観 9	
水と人との共生(福岡県柳川市)	26
広げよう「文化力」の輪! 9	
ひととマンガの近しさとは	28
風を呼ぼう、わが町に 登録有形文化財建造物との歩み 33	
アカタンの夢 歴史的砂防施設とエコミュージアム	29
地域からの「文化力」発信 21	
「公共劇場」の誕生と発展	30
日本の伝統美と技を守る人々 重要無形文化財保持者鑑 6	
宮崎君子(芸名 鶴澤友路)(義太夫節三味線)	32
国宝・重要文化財をもっと楽しむ方法 文化財鑑賞の手引き 45	
昔の「サイン」あれこれ	33
祭り歳時記 伝承を支える人々 9	
秩父祭の屋台行事と神楽(埼玉県秩父市)	34
文化庁の星 5	
主任国語調査官	35
みんなで守ろう文化財 第53回文化財防火デー	36
伝統文化こども教室のご案内	37
平成18年度「国際民俗芸能フェスティバル」	38
京都国立近代美術館	
揺らぐ近代 日本画と洋画のはざまに	39
東京国立近代美術館	
漆芸界の巨匠 人間国宝 松田権六	39
東京国立近代美術館 フィルムセンター	
生誕110周年記念 衣笠貞之助の世界	40
東京国立博物館	
特別展 悠久の美 中国国家博物館名品展	41
京都国立博物館	
新春特集陳列 神仙図	42
新春特集陳列 高台寺蒔絵と南蛮漆器	42
新春特別展覧会 京都御所障壁画展 御常御殿と御学問所	43
京都・らくご博物館「冬」～新春寄席～	43
東京文化財研究所	
無形文化遺産部第1回公開学術講座 1950年代の義太夫節と狂言謡 文化財保護委員会作成の音声資料をめぐって	44

国立新美術館の開館を迎えて	理事長挨拶	辻村哲夫・6
国立新美術館の取組	館長挨拶	林田英樹・8
国立新美術館開館に寄せて	寄稿	平山郁夫・17
国立新美術館に期待する		高階秀爾・18
国立新美術館に期待すること		黒川紀章・19
国立新美術館の設計に当たって		

特集 国立新美術館の開館

今月の
表紙

国立新美術館正面入口

新国立劇場スポットライト

1月の国立劇場

芸術文化振興基金ニュース

題字デザイン 桑山弥三郎

国立新美術館の開館を迎えて 理事長挨拶

はじめに

美術関係者の長年の夢であった国立新美術館が、いよいよ来年（平成一九年）一月二日（日）に東京都港区六本木に開館します。

国立新美術館の実現に向けてこれまで、尽力された関係各位に心より敬意を表するとともに、深く感謝申し上げる次第であります。

今日までの道のりを顧みますと、国立新美術館設立のきっかけは、昭和五〇年代の初め、美術関係者から「首都東京に公募展開催に必要な機能を備えた新しい美術館建設」の要望が国に出されたことでした。その後多くの方々の声を背景に、文化庁において設立に向けた具体的な検討が開始されたのは、平成七年のことでした。

文化庁では、設立準備委員会をはじめ各種の委員会を設置し、「基本構想」「基本計画」さらには「管理運営の考え方」等が取りまとめられました。

美術館として連携協力しながら、それぞれが特色ある活動を行っていくこととしております。既存の四美術館の役割は中期計画において、次のとおり示されています。

（東京国立近代美術館）

本館、工芸館、フィルムセンターから成る同美術館は、近・現代の美術、工芸、フィルムに関する作品その他の資料を収集・保管し、鑑賞機会を提供して、あわせてこれに関連する調査研究及び各種事業を行う。フィルムセンターは、我が国における映画文化振興の中核として、映画に関する保存・上映・研究活動を総合的に展開する。

（京都国立近代美術館）

近・現代美術及び工芸に関する作品その他の資料を収集し、保管して鑑賞機会を提供し、あわせてこれに関連する調査研究及び事業を行う。

（国立西洋美術館）



東方より国立新美術館を望む

このような文化庁の取組に合わせ、美術館としても開館に向けた準備に積極的に取り組んでまいりました。特に、平成一五年四月からは、独立行政法人国立美術館内に「ナショナル・ギャラリー設立準備室」を設け、文化庁との連携のもとに本格的な準備を進めてまいりました。

設立準備室では、開設に係る重要事項について検討するため、平成一六年三月「国立新美術館運営協議会」（座長・高階秀爾）を設け、施設貸与（公募展事業）の諸条件、共催展のしくみのほか、自主企画展、情報事業、教育普及事業等について、幅広く検討を行ってまいりました。その検討結果を踏まえながら、平成一七年度末までに、

- ①平成一九年度に公募展室を使用する団体（六九団体）の決定
- ②開館記念展およびそれに続く展覧会の内容の決定
- ③休館日は毎週火曜日とすること、また開館

昭和三〇年一〇月八日に日本国政府及びフランス政府間に成立した合意に基づきフランス政府から日本国政府に寄贈された美術に関する作品（松方コレクション）並びに西洋美術に関する作品及び資料を収集し、保管して鑑賞機会を提供し、あわせてこれらに関連する調査研究及び事業を行う。

（国立国際美術館）

日本美術の発展と世界の美術との関連を明らかにするために必要な美術に関する作品その他の資料を収集し、保管して鑑賞機会を提供し、あわせてこれに関連する調査研究及び事業を行う。

国立新美術館の役割については、中期計画において、次のように定められました。

（国立新美術館）

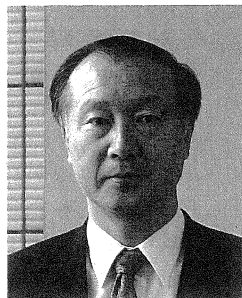
全国的な活動を行っている美術団体等への展覧会会場の提供を行うとともに、新しい美術の動向を紹介することを通じて、美術に関する新たな創造活動の展開やアーティストの育成等を支援することにより、我が国の美術創造活動の活性化の推進に取り組む。

また、国内外の美術や美術展に関する情報・資料の収集・保存・情報提供を行うとともに、日本の美術情報を積極的に海外に発信する。

今後、国立新美術館ではこの中期計画に沿っ

独立行政法人国立美術館
理事長

辻村哲夫



時間は午前一〇時から午後六時までのこと
等美術館の活動の具体的な事項について、順次決定してまいりました。

そして新美術館建設要望が国に出されて約三〇年を経た平成一八年七月一日、「国立新美術館」が機関設置されることとなりました。

国立新美術館の役割

国立新美術館は、東京国立近代美術館（東京・竹橋）、国立西洋美術館（東京・上野）、京都国立近代美術館（京都・岡崎）、国立国際美術館（大阪・中之島）に次ぐ独立行政法人国立美術館を構成する五番目の国立美術館として設置されました。

国立美術館の役割は、我が国における芸術文化の創造と発展、国民の美的感性の育成を目指しつつ、美術の振興の中心的拠点として多彩な活動を展開していくこととあります。そのために各館は一つの独立行政法人を構成する

て、国内最大級の展示スペース一万四〇〇〇㎡を活用し多彩な展覧会を開催するとともに、美術に関する情報や資料の収集・公開・提供、教育普及など、アートセンターとしての役割を積極的に果たしていくこととしております。その際は、六本木という立地条件を十分に生かし、近隣美術館との連携協力も図っていくこととしております。

おわりに

国立美術館は、近年の美術への関心の高まりや美術活動の活性化、多様化、国際化等に積極的に対応していかなければなりません。そのような中で、独立行政法人国立美術館を構成する五番目の国立美術館として国立新美術館が開館の運びとなったことは誠に喜ばしいこととあります。五館の連携協力を一層進めるとともに、国立美術館が国立新美術館を加えることとでさらに我が国美術館の顔として豊かな活動を展開していきたいと考えております。

皆様方の一層のご支援、ご理解をお願い申し上げます。

- *1 国立美術館は、四館が統合し、平成一三年四月独立行政法人に移行しました。
- *2 設立準備協議会等での検討に際しては、当初、「新しい美術館施設（ナショナル・ギャラリー）」と称されてきましたが、平成八年三月に取りまとめられた「基本計画」において仮称「新国立美術館展示施設（ナショナル・ギャラリー）」とすることとされ、平成一五年六月に正式名称「国立新美術館」と決定されました。

国立新美術館の取組 館長挨拶

活動の方針

国立新美術館は美術の新たな拠点として注目される東京都港区六本木に平成一九年一月二二日(日)に開館記念展「20世紀美術探検―アーティストたちの三つの冒険物語―」で開館します。

開館を迎えるに当たり、今日に至るまで多くの方々の尽力をいただきましたことに、あらためて御礼申し上げます。

国立新美術館は、コレクションを持たず、国内最大級の展示スペース(一万四〇〇〇㎡)を生かした多彩な展覧会の開催、美術に関する情報や資料の収集・公開・提供、教育普及活動を展開して、アートセンターとしての役割を果たす新しいタイプの美術館です。

国内外から人やモノ、情報が集まる国際都市・東京に立地する美術館として、「美術」を介して人々がさまざまな価値観に触れる機会を提供し、相互理解と共生の視点に立った新

しい文化の創造に寄与してまいりたいと考えております。

事業の内容

このため、国立新美術館では、前述の活動方針を踏まえ、次の事業を実施していきます。

(1) 展覧会事業

「さまざまな美術表現を紹介し、新たな視点を提起する美術館」を目指し次の展覧会事業を行います。

- ① 全国的な活動を行っている美術団体等に発表の場を提供します
- ② 国内外の新しい美術の動向に焦点をあてた自主企画展を開催します
- ③ 新聞社や他の美術館との共催による展覧会を開催します
- ④ 情報収集・提供事業
「人と情報をつなぎ、文化遺産としての資料を収集・公開する美術館」を目指して次のような情報収集・提供事業を実施します。

① 国内の展覧会に関する情報を収集し提供します

② 戦後の国内の展覧会カタログを網羅的に収集し公開します

③ 日本の近代以降の美術に関するさまざまな資料を収集し公開します

(3) 教育普及事業

「参加し交流し創造する美術館」を目指し次の教育普及事業を実施します。

- ① 展覧会にあわせた講演会やシンポジウム、ギャラリートークを実施します
- ② 作家トークやワークショップにより、アートを楽しみ、アートについて語りあうための場を提供します
- ③ インタラクションやボランティア・プログラムをとおして、美術館における実践的な活動の場を提供します
- ④ 美術館の教育普及事業に関する資料の収集に努めます

独立行政法人国立美術館
国立新美術館館長

林田英樹

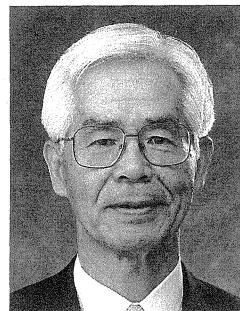


表 公募展カレンダー (平成19年度使用団体一覧)

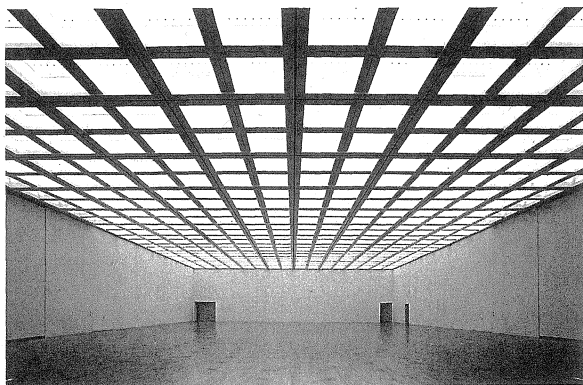
日程	団体名	展覧会名
4月3日～4月16日	水彩連盟	水彩連盟展
	社団法人創元会	創元展
	社団法人示現会	示現会展
4月17日～4月30日	現代日本書家協会	全国公募書道展
	社団法人光風会	光風会展
	社団法人春陽会	春陽展
5月1日～5月14日	国画会	国画展
5月15日～5月28日	社団法人日本新工芸家連盟	日本新工芸展
	社団法人太平洋美術会	太平洋展
	三軌会	三軌展
5月29日～6月11日	現代美術家協会	現展
	第一美術協会	第一美術展
	日洋会	日洋展
6月12日～6月25日	日本水墨院	日本水墨院展
	たぶろう美術協会	たぶろう展
	書象会	書象展
	日本自由画壇	日本自由画壇展
6月26日～7月9日	財団法人全国書美術振興会	日本の書展
	アート未来	国際公募アート未来展
	財団法人陶芸文化振興財団	全国公募陶芸財団展
	秋耕会	秋耕展
	東京イラストレーターズ・ソサエティ	TOKYO ILLUSTRATION 2007
	社団法人日本彫刻会	日彫展
	財団法人日本余暇文化振興会、茶習フォーラムアートクレイ倶楽部	銀粘土でつくるシルバーアクセサリーコンテスト
	蒼騎会	蒼騎展
	日本教育書道藝術院	日本教育書道藝術院同人書作展
	財団法人毎日書道会	毎日書道展
8月7日～8月20日	貞香会	貞香書展
	全国水墨画協会	全国水墨画展
	財団法人日本通信美術学園	日美展
8月21日～9月3日	読売書法会	読売書法展
9月4日～9月17日	社団法人二科会	二科美術展覧会
9月18日～10月1日	行動美術協会	行動展
	新制作協会	新制作展
10月2日～10月15日	一期会	一期会展
	自由美術協会	自由美術展
	一陽会	一陽展

日程	団体名	展覧会名
10月16日～10月29日	独立美術協会	独立展
	社団法人二紀会	二紀展
10月30日～12月10日	社団法人日展	日本美術展覧会
12月11日～12月24日	土日会	土日会展
	日本表象美術協会	日象展
	特定非営利活動法人国際架橋書会	国際架橋書展
	白峰社	白峰社書展
	雪舟国際美術協会	雪舟国際美術協会展
	有限会社全日本書芸文化院	全書芸展
1月8日～1月21日	財団法人独立書人団	独立書展
1月22日～2月4日	亜細亜太平洋水墨画会	亜細亜太平洋水墨画公募展
	特定非営利活動法人平泉会	平泉展
	Heart Art Communication	エイズチャリティー美術展
	国際書画連盟	国際書画展
2月5日～2月18日	産経国際書会	産経国際書展
	立軌会	立軌展
	全日本アートサロン絵画大賞展実行委員会	全日本アートサロン絵画大賞展
	社団法人日本中国水墨交流協会	日本中国水墨画合同展
	美術団体等迎会	等迎展
	あきつ会	あきつ会書道展
	新槐樹社	新槐樹社展
	日本書作院	日本書作院展
2月19日～3月3日	学校法人専門学校東洋美術学校	東洋美術学校卒業制作展
	現日会	現日選抜書展
	東京五美術大学連合卒業・修了制作展	東京五美術大学連合卒業・修了制作展
3月4日～3月17日	汎美術協会	汎美展
	全国水墨画美術協会	全国水墨画秀作展
	社団法人創玄書道会	創玄展
3月18日～3月31日	社団法人日本南画院	日本南画院展
	日本美術会	日本アンデパンダン展
	白日会	白日展

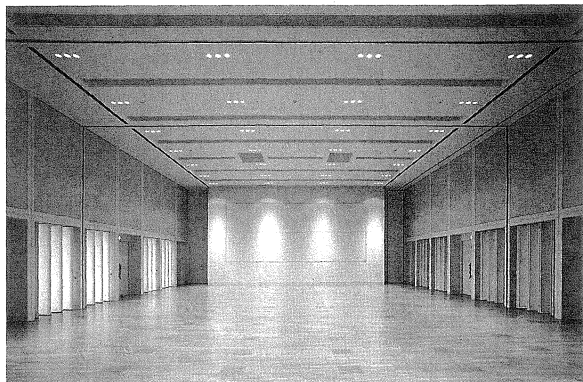
〔野外展示場のみ使用〕

日程	団体名	展覧会名
10月30日～11月12日	AJAC	Go ahead! AJAC

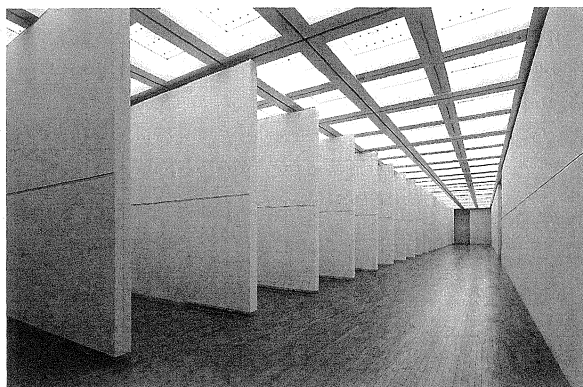
* 日程は展示室の使用期間であり、展覧会日程は各展覧会によって異なる。



企画展示室



講堂



公募展用展示室

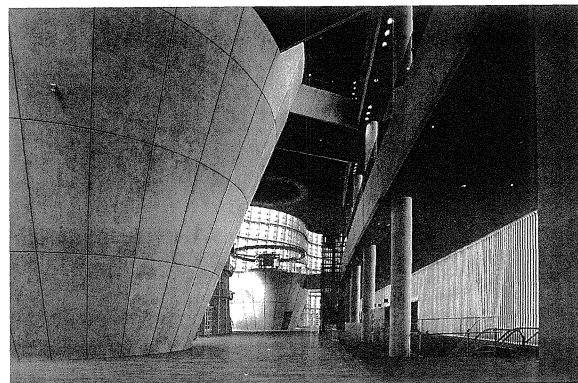
でも気軽に立ち寄っていただけるような、親しみやすく開かれた美術館を目指していきたいと思っております。

また、当館開館後には、近隣の防衛庁跡地の東京ミッドタウン内にサントリー美術館が来春に開館予定となっております。既に開館している六本木ヒルズ内の森美術館とともに六本木一帯は新たなアートのスポットとして注目されることになると考えています。これらの施設とは「六本木アートトライアングル」と称し

て、さまざまな連携・協力を図り、新しい芸術文化活動の発信拠点エリアとなることを目指してまいります。

国立新美術館は、五番目の国立美術館として、既存四美術館とともに、我が国の美術振興の一翼を担っていくこととなりますが、皆様の期待に十分にこたえるためには今後充実した活動を展開するとともに、他の美術館はもとより多くの機関との連携協力を一層密にすることが肝要です。当館を設計された黒川紀章

氏は「共生」を、また、当館のシンボルマーク・ロゴをデザインしていただいた佐藤可士和さんは「美術と人々との、開かれた新しい関係」をそれぞれのコンセプトにされております。当館の今後の目指すべき方向を的確に表していると考えております。皆様方のご期待とともに、これらのメッセージにこたえられるよう今後とも鋭意努力してまいります。どうか国立新美術館を今後とも温かく見守っていただきますとともに、ご支援・ご協力をお願いいたします。



レストラン（手前）とカフェ

これら三つの事業を軸に、魅力ある質の高い多彩な活動を展開していきたいと思えます。

展覧会事業は、一月からの開館記念展をはじめ、二月からは新聞社等との共催展も始まります。「一四」「一六頁参照」。

また、平成一九年四月からは全国的な活動を行っている美術団体等による公募展も開始されます「九頁表参照」。

情報収集・提供事業では、既に約五万点に及ぶ展覧会カタログ等を収集するとともにイ

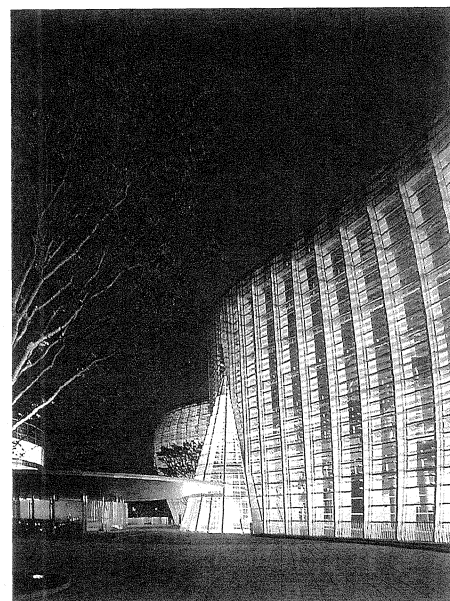
ンターネットによる展覧会情報の提供も開館に合わせて開始します。

教育普及事業では、インターン、ボランティア（サポーター・スタッフ）の受入れを既に実施しており、また、開館後は展覧会に合わせた講演会やワークショップなどを行っています。

施設の概要

国立新美術館の各種事業を実施するための施設についてご紹介します。

国立新美術館は、延べ一万四〇〇〇㎡の展示スペース（公募展示室：一〇〇〇㎡×一〇室、企画展示室：二〇〇㎡×二室、アートライブラリー、講堂、研修室等を有するほか、レストラン、カフェ、ミュージアムショップなどの附属施設の充実も図っています。外観は、前面を覆うガラスカーテンウォールが波のようにながら美しい曲線を描いています。このガラスカーテンウォール越しに、青山公園などの周辺の緑地にとけこむように植栽された庭園の眺めを楽しむことができます。このほか、免震



夜の国立新美術館

装置による地震・安全対策、雨水の再利用や地下自然換気による省エネ・省資源対策、車いす仕様のエレベーターによるバリアフリーへの対応、さらには東京メトロ乃木坂駅に直結する連絡通路など、さまざまな機能性を追求した施設づくりとなっています。

今後の目指すべき方向

国立新美術館は、明年一月に開館を迎えるわけですが、当館の活動の主体となる展覧会事業や情報収集・提供事業、教育普及事業を円滑に開始し魅力ある事業とすることはいうまでもなく、また、レストラン、ミュージアムショップなどを充実させることによって、だれ

国立新美術館
シンボルマーク・ロゴ

新 国立新美術館
THE NATIONAL ART CENTER, TOKYO

美術と人々との、開かれた新しい関係
日本で5つ目の国立美術館「国立新美術館」は、コレクションをもたない美術館。様々な展覧会を中心に、自由度の高い活動を展開する。既存の枠組みに捕らわれず、美術館の新しい在り方を提示するような存在。そして美術に関する膨大な情報を誰もが持ち寄り、そこに人々が集い、得たものを持ち帰ることができる、開かれた美術館であり、新しい美術の「場」。そんな存在を象徴するような、ユニークネスのある巨大な建物が、六本木に出現する。それは日本の美術界にとって、そして社会にとって、大きなニュース、そしてとてもインパクトのある存在になるであろうし、ならなければならない。そんな国立新美術館のシンボルマークやロゴタイプは、建築と共にその「新しさ」「先進性」「独創性」「進化し続ける精神」を象徴した表現でなければならない。そして、この美術館設立にかかわる人々の心に共通して流れる想いを集約し、日本の美術界の、現在から未来に向けてのメッセージを社会に対して発信できるような表現でなければならないという思いでシンボルマークをデザインした。

(アートディレクター 佐藤可士和)

基本情報

●開館時間

[企画展] 10:00～18:00(入館は17:30まで)
* 会期中の毎週金曜日は20:00まで(入館は19:30まで)
[公募展] 10:00～18:00
* 平成19(2007)年4月から開始

●休館日

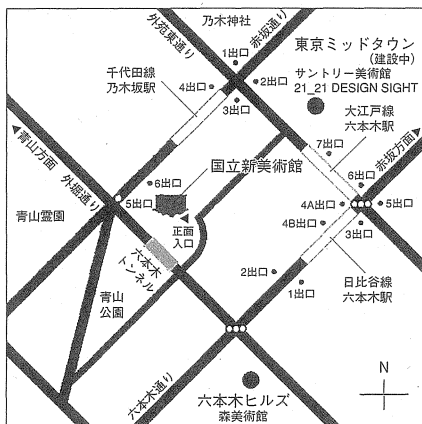
毎週火曜日
(祝日又は休日に当たる場合は開館し、翌日休館)
年末年始(12月29日～1月3日)

●観覧料

企画展ごとに定めます。
公募展は美術団体によって異なります。

●アクセス

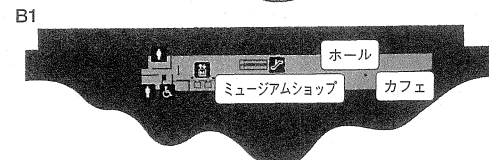
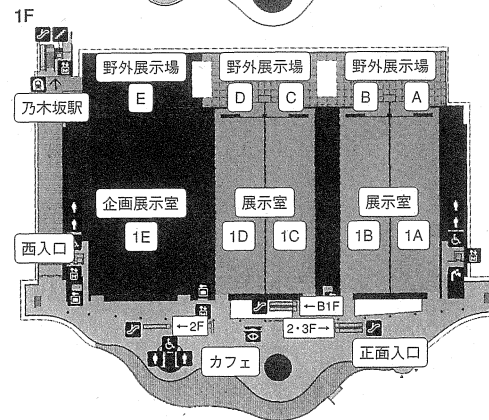
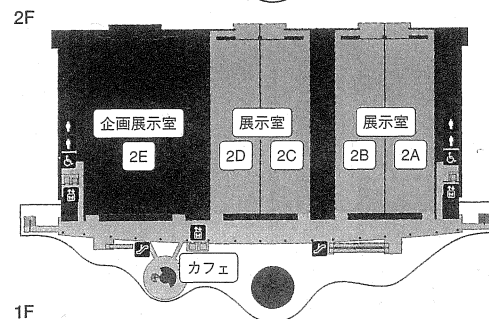
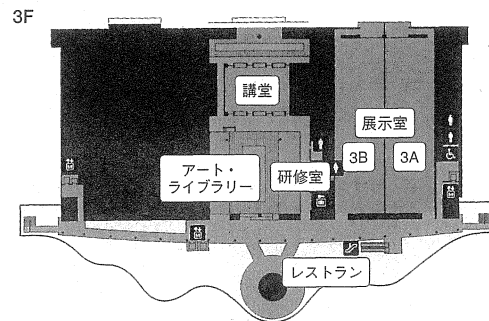
東京メトロ千代田線乃木坂駅5出口から徒歩2分
* 開館時には、美術館に直結する乃木坂駅6出口が開通します。
東京メトロ日比谷線六本木駅4A出口から徒歩5分
都営地下鉄大江戸線六本木駅7出口から徒歩4分



お問い合わせ先

独立行政法人国立美術館国立新美術館
〒106-8558 東京都港区六本木7-22-2
TEL: 03-6812-9900 (代表)
HP: <http://www.nact.jp>

フロアマップ



施設概要

所在地	東京都港区六本木7丁目22番2号
設計監理	黒川紀章・日本設計共同体 (意匠: 黒川, 構造・設備: 日本設計)
事業主体	文化庁
工期	平成14(2002)年7月～平成18(2006)年5月
建築面積/延床面積	建1万3,023.96㎡ 延4万9,709.83㎡
建物高	最高高33.3m 軒高29.5m
エントランス	天井高21.6m 両翼幅160m
階数	地上4階(1階, 中2階, 2階, 中3階, 3階, 4階), 地下1階
構造	鉄骨造(一部鉄骨鉄筋コンクリート)
展示室(公募展用)	面積1,000㎡, 10室, 天井高5m, 可動パネル20枚/最大壁長: 約370m(各室)
企画展示室	面積2,000㎡, 2室, 天井高5m/8m
講堂	面積328㎡, 約300席
研修室	面積約60㎡, 3室, 約30席(各室)
アートライブラリー	面積188㎡, 約30席
その他	レストラン, カフェ(3か所), ミュージアムショップ

平成18年度展覧会紹介②

異邦人(エトランジェ)たちのパリ1900-2005 ポンピドー・センター所蔵作品展

会期：平成19年2月7日(水)～5月7日(月)

休館日：毎週火曜日(但し5月1日は開館)

開館時間：10:00～18:00(毎週金曜日は20:00まで)＜入館はいずれも閉館の30分前まで＞

主催：国立新美術館、朝日新聞社、テレビ朝日、ポンピドー・センター

後援：外務省、文化庁、フランス大使館、東京日仏学院

協賛：大日本印刷

協力：日本通運、AIR FRANCE、J-WAVE

会場：企画展示室2E(2,000m²)

観覧料：一般1,500[1,100]円／大学生1,000[700]円／高校生800[300]円／中学生以下無料

*〔〕内は20名以上の団体料金、いずれも消費税込み

前売り：一般1,300円／大学生900円／高校生700円

*前売り券はチケットぴあ、ローソンチケットなどで取り扱っております。

展覧会HP：<http://www.asahi.com/pompidou/>

お問い合わせ：03-5777-8600(ハローダイヤル)

芸術の都パリは、19世紀末から今日まで、フランス国内だけでなく、世界中の芸術家たちを魅了してきました。パリに暮らす人々をモデルに人間の本性に迫ったピカソ(スペイン)やシャガール(ロシア)、モディリアーニ(イタリア)、藤田嗣治(日本)などの画家やブランクーシ(ルーマニア)、ジャコメッティ(スイス)などの彫刻家、パリの情景や風俗を写し出したブラッサイ(ハンガリー)やウィリアム・クライン(アメリカ)などの写真家たちが、パリでその才能を磨き、開花させたのです。本展は、フランスが誇る近現代美術の殿堂ポンピドー・センターの所蔵作品から、近代美術史を彩る著名な芸術家たちのほか、今もなお旺盛な活動を続けるアジアや南米、アフリカ出身の現代芸術家たちの作品、約200点

を紹介し、近現代美術においてパリやそこでの外国人芸術家が果たした役割を振り返る展覧会です。国際都市・東京に誕生した新しい美術館で、パリが育んだ世界中の芸術家の傑作の数々による多彩で華やかな世界が展開します。



マルク・シャガール
『エッフェル塔の新郎新婦』
1938～39年
©ADAGP, Paris&SPDA, Tokyo, 2006

平成18年度展覧会紹介①

開館記念展 20世紀美術探検 —アーティストたちの三つの冒険物語—

会期：平成19年1月21日(日)～3月19日(月)

休館日：毎週火曜日(但し1月23日は開館)

開館時間：10:00～18:00(毎週金曜日は20:00まで)＜入館はいずれも閉館の30分前まで＞

主催：国立新美術館

協力：日本航空

会場：企画展示室1E、展示室1A～1D(6,000m²)

観覧料：一般1,100[800]円／大学生600[400]円／高校生400[200]円／中学生以下無料

*〔〕内は20名以上の団体料金、いずれも消費税込み

前売り：一般900円／大学生400円／高校生200円

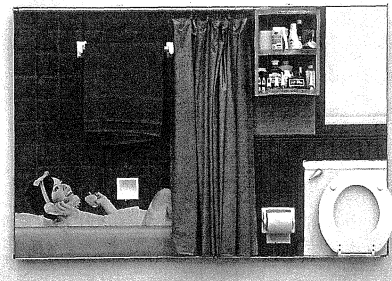
*前売り券はチケットぴあ、ローソンチケットなどで取り扱っております。

展覧会HP：<http://www.nact.jp/>

お問い合わせ：03-5777-8600(ハローダイヤル)

20世紀の大きな特徴のひとつは、それが都市を中心とする物質文明の時代であったということでしょう。大量の工業製品や商品など、さまざまな物にあふれる世界に身を置く経験は、先立つ時代の人類にはまったく未知のも

のでした。アーティストたちは、このような新しい状況を敏感にとらえ、それを革新的な芸術の形式によって表現しようと試みます。この展覧会は、冒険精神にあふれたアーティストたちの果敢な挑戦から生まれた多種多様な20世紀美術の展開を、デザイン、工芸、建築などのさまざまな分野にも目を配りながら紹介しようとするものです。国立美術館のコレクションを核にしながら、国内外の美術館に協力を依頼し、約600点の貴重な作品が、世界各地から集合します。また、現代最先端の表現を追求している内外の作家7人が参加し、大規模な新作インスタレーションを発表します。6,000m²の広大な展示空間に展開される、これまでに例を見ない野心的で総合的な展覧会は、内外の熱い注目を集めることになるでしょう。



トム・ウェッセルマン『浴槽コラージュ#2』1963年、東京都現代美術館蔵 ©Estate of Tom Wesselmann/VAGA, New York&SPDA, Tokyo, 2006

寄稿

国立新美術館開館に寄せて

長年の願望であった、国立新美術館が、いよいよ明年六本木で開館されることになりました。これは、文化庁をはじめ、このプロジェクトの実現に努力された関係者の熱意によるものです。

国立博物館や美術館は、東京、京都、大阪、奈良、福岡など主要都市にあります。が、それぞれの館では、役割分担があり、その館に応じて機能面でも専門性が分かれています。東京国立博物館は、日本の古代から江戸末期の東洋部門を専門としています。また、メディアと共催の特別展も、各社との回数に規定があります。例外は時によってありますが、専門内容が制限されています。

また、東京・京都国立近代美術館は、近代美術に関する作品等が主流となっています。国立西洋美術館は西洋美術等の美術が主流となっています。では、日本の美術団体はどのような型式で作品展示をしてきたのかというと、これには長い歴史があります。かいつまんでい

えば彼らは主として上野の山に、展示場を設け、明治以降の発表の場としてきたのでありますが、それは都立美術館が美術団体展を支えてきた歴史でもありました。

今日では、美術団体といっても、大小さまざまな内容の団体があり、上野の東京都美術館で、一年中発表を行っています。が、団体が増加するに及んで、会場の確保や期間の問題で、十分といえない展示に主催者当局は悩んでいました。

このような事情から、各団体代表が集まり文化庁に国立の美術館建設を願ひ出しましたのが、三〇年前になります。現在の東京都美術館より、規模も大きい施設を希望していました。最初は、土地の選定に時間を要しましたが、運よく六本木に美術館建設予定地が決まりました。文化庁では、美術団体、マスコミ、美術批評家、公立美術館長を集め、設立準備委員会を設け、一年以上にわたる会議を重ね、新美術館構想を具体的に討議しました。私は、

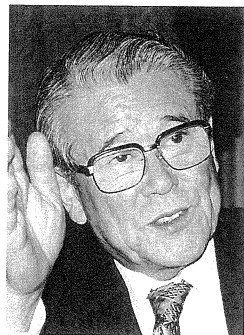
同委員会の座長を務めて、各分野の意見を集約しました。

新美術館構想は、パリのグランパレに似ています。グランパレは、同時に大型の展示会を二・三開催できる規模です。これが実現するだろうとの希望がありました。

今日では、国宝や重要文化財のような国民の貴重な宝は文化庁長官の公開の承認を受けた美術館などにおいて公開されています。デパート、百貨店の催事場では公開することはできません。

明年から始まる国立新美術館により、日本美術や海外の美術品の企画展などが開かれ、日本文化に大きく貢献するものと期待しています。同時に、これまで一〇〇年以上に及ぶ発表の場となった、上野の東京都美術館とも相まっての美術文化の発信は、内外に大きく貢献するものと期待しています。六本木の新美術館はこれから新しい文化の砦として発展するよう、関係者一同は祈ってやみません。

画家
平山郁夫



平成18年度展覧会紹介③

黒川紀章展 —機械の時代から生命の時代へ—

会期：平成19年1月21日(日)～3月19日(月)
休館日：毎週火曜日(但し1月23日は開館)
開館時間：10:00～18:00(毎週金曜日は20:00まで)〈入館はいずれも閉館の30分前まで〉

主催：国立新美術館、黒川紀章展実行委員会
会場：展示室2C, 2D (2,000m²)
観覧料：無料
お問い合わせ：03-5777-8600
(ハローダイヤル)

国立新美術館の設計者である建築家・黒川紀章の主要作を回顧し、さらに現在取り組んでいる世界各国の最新プロジェクトを紹介し、ユニークな模型や映像を使い現代建築・都市の将来を展望しようとするものです。黒川紀章はCIAM(近代建築国際会議)の崩壊以後、1959年に「機械の時代から生命の時代へ」の

時代の転換を宣言し、1960年にはメタボリズムグループの運動に参加、以来約半世紀、一貫して生命の時代の建築・都市の研究、創造に挑戦しています。メタボリズム、共生、リサイクル、エコロジー、生態系、情報といった黒川紀章が1960年代から提起し続けているテーマは、現在世界のテーマとなっています。

平成18年度展覧会紹介④

文化庁メディア芸術祭10周年企画展 日本の表現力

会期：平成19年1月21日(日)～2月4日(日)
休館日：毎週火曜日(但し1月23日は開館)
開館時間：10:00～18:00(毎週金曜日は20:00まで)〈入館はいずれも閉館の30分前まで〉

会場：展示室2A, 2B (2,000m²)
観覧料：無料
展覧会HP：<http://plaza.bunka.go.jp/>
お問い合わせ：CG-ARTS協会
「文化庁メディア芸術祭事務局」
03-3535-3501

主催：文化庁メディア芸術祭実行委員会(文化庁・CG-ARTS協会)、国立新美術館

新しい表現領域であるメディア芸術の振興を目的とした「文化庁メディア芸術祭」が10周年を迎えます。本展では、「日本の表現力」をテーマに、デジタルアートからゲーム、ロ

ボット、アニメ、マンガにまで広がる「日本のメディア芸術」を現在・過去・未来の三つの視点で紹介します。

寄稿

国立新美術館に期待する

このたび東京の六本木地区に、新たに国立新美術館が開館を迎える運びとなったことは、その設立を待ち望んでいた多くの芸術家や美術愛好家にとって大きな朗報といつてよいでしょう。これまで国立美術館としては、東京上野の国立西洋美術館、東京と京都の国立近代美術館、それに大阪中之島の国立国際美術館の四館がありました。今回五番目の美術館が誕生したわけです。

しかしこの新美術館は、他の国立四館と比べて大きな違いがあります。それは所蔵品をもたない展示場中心の施設だということです。コレクションがない代わりに、そこには他のどの国立美術館よりも広い展示スペースがあります。とすれば、新美術館のこれからの活動の成否は、一にも二にもこの展示場の運営にかかっているといえます。

この広大な展示スペースは、全国的規模の

公募団体用と、美術館が独自に、あるいは新聞社等の他の機関と共同で開催する企画展用とに分けられています。日本の近代美術の歴史において大きな役割を演じた美術団体には、今後とも一層の活躍を期待したいのですが、新美術館に対しては、歴史も規模もさまざまである美術団体の多様な希望に応じて、いかに無理なく、公平に、しかも有効にスペースを配分するかという調整機能が求められます。使用団体の選定も含めて、その調整の過程は、だれの目にもよくわかる透明なものでなければなりません。同様の透明性は、展示場を利用する団体にとっても必要なことです。

しかし美術館の真価が問われるのは、何よりも企画展の内容によつてです。国内海外の美術館との連携を保ちながら、明確な視点に基づいた質の高い展覧会を期待したいところです。展覧会の在り方もさまざまです。広く世に

大原美術館館長
高階秀爾



知られた名作を招来展示することももちろん重要ですが、忘れられた画家や将来性のある新人を発掘することも大事な役割です。例えば、美術館が独自のやり方で若手芸術家を対象とする公募展を定期的に開催するということが考えられます。それが若い作家の登竜門になればすばらしいことだと思います。

新美術館に期待するもう一つのこと、展覧会カタログや関連資料の収集公開という、美術情報センターとしての役割です。特に日本の近現代美術に関する資料はすべて揃えるというぐらいの意気込みがほしいところです。美術館には既にかなりのカタログがあるようですが、それは今後とも継続的に収集することが是非とも必要です。そのための予算、スタッフの充実も含めて、新美術館の将来に大いに期待したいと思います。

寄稿

国立新美術館に期待すること 国立新美術館の設計に当たって

国立新美術館は、国立の美術館として、初めて六本木という新しい文化都心に建設される大規模な美術館です。上野の文化の森とは別の新しいビジネス、文化、ライフスタイルの発信地となる、もう一つの都心型文化の森の出現です。

この敷地は旧陸軍の第三連隊の建物をその位置（一部をエントランス前）に保存し、歴史と現代の共生（歴史の証言と新しい最先端の現代建築という未来への証言の共生）に挑戦しています。

この場所は、青山公園につながる森の生態系の一部をなしており、狭い敷地にもかかわらず、自然や森との共生を実現できました。自然や森との共生を実現するため、ファサードは透明なフラクタル幾何学（前衛的幾何学、アメリカ・マンデルブロー）の波打つファサードとなっており、この美術館のニックネームを「ビッグ・ウェーブ」と呼びたいと思います。

又、この新美術館は、収集品をもたない美

術館です。展示室は二〇〇〇㎡の単位が七単位一万四〇〇〇㎡あり、世界の巡回展、企画展を企画展示する企画展示室と、日展をはじめとするさまざまな公募展グループのすべてに対応でき、多い場合には、同時に一二の展示会が同時に開催されます。さらに、二〇〇〇㎡はさらに小単位に分割でき、多様な展覧会を開催することができま

す。その機能を支えるのが、搬出投入の動線、写真撮影、検査、一時保管、審査、展示までの機能的動線と、学芸員の思うままの企画展示が可能な白の整形の展示室です。ここでは展示品が主役であり、建築はそれを支える先端技術の脇役となります。

しかし、このような六本木の場所は、芸術文化（食文化を含む）・経済（ニュービジネス・ファッション）ライフスタイルの交流の場としてふさわしい。

それが波打つ透明なファサード（太陽熱・紫外線一〇〇％カットの省エネ・エコ建築）に

建築家

黒川紀章



囲まれた森の中のアトリウム（交流の場、サロン）です。アトリウムには、世界トップの三ツ星レストラン『ブラッスリーポール・ボキューズ・ミューゼ』とカフェ、カフェテラス（アウトドア）、ミュージアムショップ、世界のデザイナー・グッズ等があります。

このアート・サロンは、又、隣接する森アートセンター、サントリー美術館と連動して交流の場を広げることができま

す。オープン後しばらくは、夕方閉館（週末は午後八時まで）となりますが、将来は森アートセンター、サントリー美術館と連携し、六本木らしく夜のサロン、夜の美術館としても構想して設計してあります。

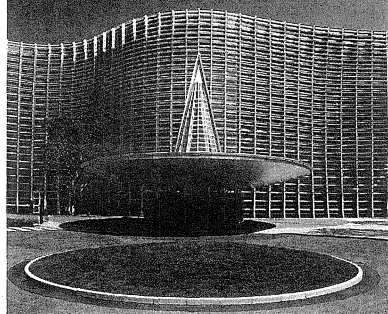
この世界最先端の国立新美術館があらゆる人たち、あらゆる分野に開放され、サステナブルに発展し続け、経営可能な新しい美術館モデルとして、世界へ向けて挑戦し続けていくことを強く望み、確信しています。

開かれた「新しい美術の場」の可能性

アートディレクター
佐藤可士和



2007.01.21 THE NATIONAL
ART CENTER, TOKYO
GRAND OPEN AT ROPPONGI



新

THE
NATIONAL
ART CENTER,
TOKYO

国立新美術館開館告知ポスター

今、時代のキーワードは「オープン」です。インターネットの爆発的な普及もあり、メディアに対する概念や人々の情報の取り方、広告やコンテンツとのかかわり方などが劇的に変わろうとしています。インターネットの存在のしかたの変化による影響が大きいと考えられ、世界中の人々の意識を変えていっています。そのような状況の中「オープン」というキーワードが注目されるのは、クローズしてはそこから何も生まれないということに皆が気づいてきたからではないでしょうか。

そんな時代に必然的に登場したのが、国立新美術館です。日本で五つ目の国立美術館である国立新美術館は、コレクションをもたない美術館で、さまざまな展覧会を中心に自由度の高い活動を展開します。既存の枠組みにとらわれず、美術館の新しい在り方を提示するような存在です。美術に関する膨大な情報をだれもが持ち寄り、そこに人々が集い、得たものを持ち帰ることができる開かれた美術館であり、新しい美術の場です。そんな国立新美術館のシン

ボルマークとロゴタイプを僕がデザインさせていただきました。

デザインするに当たり、国立新美術館を「新」という一字で表してみました。「新」という日本語のモチーフには、日本の美術館としてさまざまな新しい試みを展開していく存在だということが凝縮されています。そして漢字をモチーフにすることにより、より多くの人々に親しみやすく、なじみやすい存在となることを目指しました。「新」という文字のすべてのエレメント、すべての角は閉じておらず、開かれています。それは開かれた「新しい場」を意味しています。そこに人々が、そして美術に関するあらゆる情報が集まり発信される、開かれた窓のような場である国立新美術館の象徴。この窓には、美術と社会、美術と人々との新しい関係、新しい未来を築きたいという願いが込められています。

この国立新美術館のように、国家や企業、社会など、あらゆるところで「開かれること」が今まさに求められていると思います。

◆特集◆

魅力ある日本文化の発信

「文化庁提言」

日本文化発信に関する文化庁の取組

「寄稿」

音楽を通じた日本文化の世界への発信

「事例紹介」

国際文化フォーラム

座談会「芸能と文化」報告

座談会「音楽と文化」報告

座談会「神話と文化」報告

海外から見た日本文化の魅力

座談会「美術と文化」報告

国際文化フォーラムを開催して

奈良県民の反応

◆文化庁ニュース◆

文化庁メディア芸術祭

平成一八年度文化庁日本語教育大会

平成一八年度文化庁長官表彰表彰者決定

平成一八年度文化庁長官表彰表彰者決定

編集後記

六本木ヒルズ五三階の東京シティビューから青山方面を見ると、波のように美しい曲線を描くガラスカーテンウォールに前面を覆われた、特徴ある建物が眼下に見えます。こちらが今回の特集記事の「国立新美術館」建物です。来年一月二日に開館を迎えますが、既に各方面から注目を浴びており、NHKをはじめとするさまざまなメディアで取り上げられたほか、美術館主催の「建築ツアー」（美術館建物を巡るツアー）は大盛況だったとのことでした。

近隣には防衛庁跡地を再開発中の「東京ミッドタウン」のビルが威容を見せており、その中には「サントリー美術館」が来年春ごろオープンする予定です。六本木ヒルズ内の「森美術館」とともに、「六本木アートトライアングル」と称してさまざまな連携・協力を図っていく予定のことです。開館後は、週末にこれらの美術館をめぐることも、六本木を楽しむ新たなスタイルとして定着して欲しいです。皆様の来館をお待ちしております。

◆連載◆

「いきいきミュージアム 美術館・博物館事業レポート」

「芸術文化の風」

「著作権Q&A」

「言葉と暮らし」

「伝建地区を見守る人々」

「伊根浦・倉家の正月」

「くらしが育む文化的景観」

「手間詰」

「九折」

「風を呼ぼう」

「ぶらり・のんびり・ゆらゆら」

「地域の「文化力」発信」

「日本の伝統美と技を守る人々」

「魚住安彦・雅号」

「国宝・重要文化財をもっと楽しむ方法」

「祭りと神話」

「野沢温泉の道祖神祭り」

「文化交流使の活動報告」

「源田悦夫」

文化庁月報 12月号 (通巻459)

平成18年12月25日印刷・発行

編集—文化庁

〒100-8959 東京都千代田区丸の内2-5-1

発行—株式会社 ぎょうせい

本社 〒104-0061 東京都中央区銀座7-4-12

本部 〒167-8088 東京都杉並区荻窪4-30-16

電話 編集 03 (3571) 2126

販売 03 (5349) 6666

URL : http://www.gyosei.co.jp

印刷所—ぎょうせいデジタル株式会社

●本誌の掲載のうち、意見にわたる部分については、筆者個人の見解であることをお断りいたします。

定価540円 本体514円 送料76円

年間購読料6,480円

本誌のご購読のお申し込みは、直接弊社の本・支社、あるいは最寄りの書店へお申し込みください。

広告の問い合わせ・申し込み先

(株) ぎょうせい営業部広告課

電話03 (5349) 6657 (ダイヤルイン)

©2006 Printed in Japan ISSN 0916-9849

本誌は本文に再生紙・大豆油インキを使用しております。

●ホームページアドレス●

http://www.bunka.go.jp